令和４年度上半期の運営を踏まえた課題と令和４年度研修における対応及び令和５年度計画への反映

課題		具体例		令和４年度研修における対応
1	不慮の事案による講義への影響	①	大雨により現場実習ができなかった。【下刈実習】	屋内で目立ての実習、講師が所属する事業体で保有する高性能林業機械の見学等内容を変更して実施した。
		②	大雨により現場実習ができなかった。【間伐実習】	講師と調整し日程を変更して実施した。
		③	研修生から新型コロナウイルスの濃厚接触者が複数人確認され登校できなかった。【間伐】	zoomによるリモート講義に切り替えることで、講義を実施することができた。
2	苦手な科目などの効果的な学習方法	①	架線集材の力学の授業で数学などが苦手な研修生がおり、試験合格が危ぶまれた。【架線集材】	苦手な科目を受け身とならずに理解を深めるため、グループ単位で演習問題を解き他グループと教え合う授業を行った。
		②	座学などで講義内容の振り返り（復習）を行っておらず、学習の定着が懸念された。	自主学習の時などに講義内容をクイズ形式で振り返る時間を設けたり、講義内容をキーワードを使って説明するレポート作成する課題を与えることで、研修生が上半期の講義を振り返る場を設けた。
		令和５年度計画への反映→		別々に行っていた講義の中で関連を持たせながら一体的に実施することで理解を深められるよう改善した。 事例１：周囲測量（地図の見方、測量の基礎）、立木調査、3次元計測システム 事例２：境界管理、林業ICTと森林GISの基礎、周囲測量（GNSS操作）

令和４年度上半期の運営を踏まえた課題と令和４年度研修における対応及び令和５年度計画への反映

課題		具体例		令和４年度研修における対応
3	チェーンソーやハーベスタ等林業機械操作実習の実践的・効率的な方法	①	ハーベスタシミュレータで操作練習を行っていたが、マシン上では可能な動きでも現場では危険な場合があることから、現場に即した操作を学ぶ必要があった。	現場でハーベスタを操作しているオペレータを講師に招き、研修生を指導してもらうことで、現場に即した操作方法を練習できるようにした。
		②	研修生だけでチェーンソーの自主トレーニングを正しく行う方法を習得する必要があった。	ＪＬＣ、ＷＬＣのルールに基づくチェーンソーの基本操作を指導できる方を講師に招いて、研修生を指導してもらうことで、その後の自主学習でも目標を持ってトレーニングできるようにした。
		③	チェーンソー操作の講師よりチェーンソーに触れる時間をより多く、かつ定期的に設ける必要があるとの指摘を受けた。	下半期では薪割り実習などの講義を一部見直し、定期的にチェーンソートレーニングができるよう改善を図る。令和５年度の講義についても同様に見直しを行う。
		④	チェーンソートレーニングの際、班分けをして行っていたが待ち時間が生じて効率的に実施できなかった。	丸太を固定する器具を作成し、伐倒練習機と合わせて３カ所でチェーンソートレーニングができる環境を整備した。
		令和５年度計画への反映→		①チェーンソーや林業機械操作等実習の時間を定期的に確保した。 ②チェーンソー、刈払機に係る資格取得後すぐに各メーカーによるチェーンソー、刈払機メンテナンスの講義を実施するよう改善した。

令和４年度上半期の運営を踏まえた課題と令和４年度研修における対応及び令和５年度計画への反映

課題		具体例		令和４年度研修における対応
4	安全確保	①	研修中にマムシに噛まれる事案、蜂に刺される事案が発生した。	事前に講師等と協力して実習現場等を下見して危険がないかを確認することとした。 研修生に対して蛇や蜂などに十分注意するよう指導した。
		令和５年度計画への反映→		森林内の危険生物に係る講義の時間を設けた。
5	就業体験（インターンシップ）先の確保	①	年度当初は就業体験に協力いただける林業事業体が２１事業体にとどまった。	研修生と面談を行って就業を希望する事業体を選定し協力を表明していない事業体であった場合でも直接依頼して就業体験を受け入れてもらった。 その結果、就業体験受入・協力可能事業体数は３６事業体となった。
		令和５年度計画への反映→		研修生に幅広く県内事業体の情報が得られるよう就職ガイダンスを実施。
6	実習現場の確保	①	実習（特に植付、枝打ち、除伐、作業道作設、高性能林業機械操作）の現場が少ない。 今年度は講師をお引き受けいただいた事業体の現場などを提供いただき実施する予定であるが、次年度以降も継続して実習ができる体制構築が必要。	植付実習では県林業研究センターの採穂園の一部を活用した。 できるだけ移動時間が少ない近隣で実習場所を確保できるよう調整を図っていく。
7	研修生とのコミュニケーションの取り方	①	１４名の研修生への連絡について、電話では時間がかかり効率が悪いため、どのように連絡体制を構築するかを検討する必要があった。	林業アカデミーと研修生１４名との間でライングループを作り、通常の連絡であればラインを活用することとした。
		②	研修生の悩み事や講義や運営の改善点、不満などを聞き、改善を図る必要があった。	所長と研修生全員が懇談する機会を設けたほか、定期的に個別面談を行った。